

しいたげられた天才

小川未明

青空文庫

けものきば
 獣の牙をならべるように、遠く国境の方から光った高い山
 んみやく
 脈が、だんだんと低くなつて、しまいに長いすそを海の中へ、
 ぼつ
 没していました。ここは、山間の、停車場に近い、町の形
 をした、小さな村でありました。

その一軒の家へ、戦時中に、疎開してきた、家族がありまし
 た。からだの弱そうな男の子が、よく二階の窓から、ぼんやりと、
 彼方の山をながめて、なにか考えていました。季節が秋にはいる
 と、どこからともなく、渡り鳥があかね色の夕空を、山の上高
 く、豆粒のように、ちらばりながら、飛んでいくのが見えまし
 た。子供は、鳥影のまったく空の中に吸い込まれて、見えなく

なるまで見送みおくつていました。やがて日が暮ひれてしまふと、さらさらと音おとをたて、西風にしかぜが、落ち葉おぼを雨戸あまどに吹ふきつけるのです。

「お母かあさん、いつ、東とう京きやうへ帰かえるの。」と、子供こどもは聞きくのでした。

あかりの下したで、冬ふゆの着物きものの手入ていれをしていた、母親ははおやは、

「新聞しんぶんを見みると、また、二、三日にちまえ前まへも空襲くうしゆうがあつたそうですよ。私わたしたちが帰かえつても、もうお家うちがないかもしれませぬ。だから、空襲くうしゆうがなくなつてから、帰かえりましようね。」と、さとすのでありました。

こう聞きくと、子供こどもは、しかたがなく、おもちゃの木琴もつきんを取とり出して、鳴ならしはじめました。その音おとは、外そとの風かぜの声こゑに、かき消け

されたけれど、子供は、さびしさをまぎらせていました。

いよいよ戦争が終わって、空襲の恐れがなくなると、この家族は、古いすみかへもどっていききました。そのとき、糸の切れた木琴は、ほかの不用になった品物といっしょに、捨てられるごとく、この村へ残されたのでした。

炭焼きじいさんの、孫の秀吉は、よく祖父の手助けをして、山から俵を運ぶために、村端の坂道を上ったり、下ったりしました。そのたびに、ちようど道のそばにあった、古道具屋の店さきにかかった、木琴に心を奪われたのです。

「どうでも、おじじにねだって、あれを買ってもらうぞ。」と、かがやく瞳で楽器を見つめて、こう、ひとり語をするのでした。

しかし、よく働く孫の、この願いは空しくなかつた。ついに、その木琴が、秀吉の手に入つたとき、どんなにうれしかつたでしょう。彼は、苦心して、細い針金で、糸の切れたのをつなぎました。糸を強く張つて、ピン、ピンと、ひくと、いい音に、一つ一つ、羽があつて、雲切れのする青い空へ、おどり上がるよ
うな気がしました。

山や、谷や、木立までがこの音を聞いて、急に目覚めたものか、いままでに感じないほど、喜びと、悲しみの色を濃くしたのでした。また、雲までが、慕い寄るように、頭をたれるのでした。「なるほど、いい音が出るのう。しかし、おまえは、不思議な子だ。やっと歩くような小さなときから、あめ屋の太鼓が好きで、

その後を追つて、迷い子になつたことがあるし、水車場のそばを通れば、じつと立ちどまつて、車の鳴る音に耳をすましたものだ。生まれつき、なんでも音が好きなのだ。だれから教わらなくても、こうして、木琴を鳴らせば、いい音色が出るじゃないか。ひとつ、学校の先生のところへいつて、どうしたら、上達するか、お話をうかがつたらいいぞ。」と、おじいさんは、秀吉の鳴らす、木琴を感じ心して聞き、たばこをすいながらいいました。

「先生に、聞けば、おれが音楽家になれるかどうか、わかるかい。」と、秀吉は、せきこんで、聞きました。

「学校の先生は、オルガンでもピアノでも、なんでも弾きな

さるぞ。わからしやらなくて、どうする。」と、おじいさんは答
えました。

山へいくときと、反対に道をいつて、隣村にさしかかる

うとする峠に立つと、あたりに、目をさえぎるなものもなく、

見晴らしが開けるのでした。盛夏でも、白雪をいただく剣方嶺

は、青い山々の間から、夕日をうしろに、のぞいていました。

その、こうごうしい、孤独の姿は、いつも秀吉に、なにか限り

ない、あこがれの感じをいだかせるのでした。そして、これから、

彼の訪ねようとする学校は、このとき、ひからびた白い屋根を、

目の下に見せていました。

「君は、歌が好きなのか、それとも、音楽が好きなのか。」と、

あたまかみなが
頭の髪を長くして、うしろへなでおろした、まだ若い先生が、
聞きました。

「さあ、どちらかなあ。」と、秀吉は、口ごもって、彼は顔を
赤くして、最初の質問に、自分がわからなくなりました。

（男は、なんでも、思ったことは、いうのだぞ。）と、祖父の、
日ごろのいいつけが、浮かびました。

秀吉は、顔をあげて、先生を見ながら、

「どちらも好きなんです。いい音のするものなら、水の音でも、
風の声でも、好きなんです。先生、それは、やはり、音楽じ
やないんですか。」と、秀吉はしんけんな目つきをして、先
生に、ただしました。

「は、は、は。なんでも好きか、なかなか、君は欲ばりだな。しかし、音楽は芸術のうちでも、いちばんむずかしいのだ。天才ならばべつとして、学ぶには、うたうのも、鳴らすのも、基礎となる調子から学んで、練習が、たいへんなのだ。ちようど、文章を作るにも、文法を知らないと書けないように、好きだからといって、すぐになれるもんじやないのだよ。」

と、先生にいわれました。

このもつともらしく聞こえた、先生の言葉は、秀吉を真つ暗な絶望へつき落としました。

「好きだけでは、だめでしょうか。」

「まず、だめだな。しかし、君はたいへん熱心だから、せめて、

みみ 耳だけなりと発達させるといい。僕も、君のことは考えておこ
うよ。」と、人のいい先生は、まずしげな少年をあわれみ
ながら、こういつて、なぐさめてくれました。

秀吉は、出かけるとき、胸に描いた、桃色の希望の影は、
どこかへ消えて、家へもどるときは、失望の底を歩くように、
運ぶ足が重かったのです。ただ、先生の考えておいてくださ
るといふ言葉に、はかない望みをかけていたのであります。

その翌日から、彼はまた山へてつだいに出かけました。そし
て谷川の流れへくれば、いつに変わらざよかつたし、林でなく
小鳥の声を聞けば、無条件で自然が讚美されるのでした。

「だが、学問がなくては、まだほんとうのことは、わからぬの

だろうか。「と、彼は、急に元気がなくなり、気持ちが悪くなる
 のでした。そして、いままでのように、自由に、無心に、木琴
 を鳴らして、恍惚となることができなくなったのであります。
 ああ、なんで自分が自然のふところへ、いままでのように、自由
 にたのしく入ることが、悪いのだろうか。また、先生のお言葉
 を聞いてから、どうして自分に、それが許されなくなったのだろ
 うか。

「ああ、芸術の規則なんていうもの、だれが作ったのだろう
 か。」と、彼は、まどい、うたがい、そして、煩悶しました。
 実直な先生は、けつして、少年を苦しめようなどと
 は考えなかった。それどころか、願いをかなえてやろうと、その

後、心にかけていました。

ある日、先生はわざわざ、彼の家を訪ねて、さぞ、少年が喜ぶだろうと、吉報をもたらしただけでした。

「こんなところが、あるのだがね。N町の楽譜店で、唄や音楽の好きな小僧さんをさがしているというのだ。つい、昨日友人から聞いたので、早速知らせにきたが、どうかね。いつてみる気なら、紹介するが。」と、いつてくれました。

秀吉は、よくようすを聞くと、そこへいけば、毎日のように、有名な音楽や、人気のある大家の歌が聞けるので、ぜひ奉公をして、そこで勉強しよう、決心しました。先生からの話とあつて、祖父は、わけもなく賛成したのです。

いよいよ、門出かどでの日ひがきました。彼は、停車場ていしやじょうへの道みちを急いそぎつつ、ふり返かえつて、一日いちにちとして見みなかつたことのない、山々やまやまをながめました。雲くもがでていて、剣けん方みね嶺だけだけが、隠かくれていました。彼は、日ひごろ敬慕けいぼする山やまだけに、姿すがたが見みえなかつたけれど、別わかれを惜おしむよう、頭あたまを下げました。待まつ間まもなく、汽き車しやがきたので、意いき気ご込んで、それへ乗のりました。

「これが、東とう京きやうへいくのだと、もつといいけれどなあ。」と、思おもいました。

なぜなら、彼かれは大きおおな都と会かいほど、文ぶん化かが発は達たつし、芸げい術じゆつが盛さかんであり、それによつて自じ分ぶんを成せい長ちやうさせることができるかんがと考えたからです。

わずか一時間じかん足らずで、汽車きしやは目的地もくてきちへ着つきました。N町エヌまち

までは、そんな近い距離ちかきよりでしかありませんでした。

だが、そこには女学校じよがっこうあり、中学校ちゆうがっこうあり、また、専門せんもん

学校がっこうがあつたから、むろん、喫茶店きつさてんや映画館えいがかんなどもありま

した。しかも、彼のいく楽譜店がくふてんは、この町まちでも、いちばん人ひと

通とおりの多いおほい、にぎやかなところでした。

店みせは、想像そうぞうしたほど大きくおほなかつたが、各種かくしゆの蓄音機ちくおんきや、

新型しんがたの電蓄でんちくがならべてあり、レコードは、終日しゆうじつ回かいてん転てんし

ていました。いつも店頭てんとうへ人の立たたぬことはなく、ことに夕暮ゆうぐ

れどきなど、往來おうらいまであふれていました。

秀吉ひできちは、いった日ひから流行歌りゆうかうかの楽譜がくふや、歌手かしゆの名まえなを覚おぼ

えるのに一苦労ひとくろうでした。制帽せいぼうをかぶった二、三人にんの学生がくせいが、
 店の前みせまえに立つて、話はなしをしていました。

「Hは天才エイチ てんさいだね。なにをうたつてもうまいじゃないか。」

「わけても、エレジーものはね。」

「あれで、美しいうつくと申し分もうぶんないがな。」

「いや、目めに魅力みりよくがあるよ。」

「よせやい。顔かおだつて、声こえだつて、Kケーが一番ばんさ。」

学生がくせいたちは、いわゆる芸術家げいじゆつかを、芸者げいしやかなどのよう
 品しなざだ定めしているのです。秀吉ひできちはびつくりしたというより、

あてがちがつて、別べつの世界せかいへ飛びこんだごとく、後悔こうかいが先さきに立た
 ち、とまどいしてしまいました。

あわれな彼は、ひそかに、ケーエイチ KとHの、若い映画女優の写真を見くらべたり、また、派手な洋服姿をした人気作曲家の写真などを取り上げて、

「ああ、これが、ほんとうの芸術家というものなのか。」と、いままでの、自分の愚かさを恥じながら、茫然と見つめていました。

そう考えると、先生の言葉が、いまさらのごとく頭に浮かんだりして、なんのために、自分は、こんなところへきたのだろうかと、いくたびとなく後悔されました。そして、ただ自分の野暮がうらめしく、悲しく、気恥ずかしくなつて、深いため息をつくのでした。

一、二年のねん後のちには、天才てんさいの芽めは、まったく踏ふみにじられて、
あとかたもなく、如才じよさいのない、きざな一個この商しょう人にんができてあ
がるでありますよう。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

初出：「白象 第1冊」

1949（昭和24）年11月

※表題は底本では、「しいたげられた天才《てんさい》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

しいたげられた天才

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>